

此方も景氣よく檄電の朗讀をやる、一通毎に殿堂を震動させるやうな執拗に拍手の涙が起る、萬歳の聲に送られて次に高野線支部の宿所普門院に向ふ、此處は粹人が多いと見てて歌をやつてゐる人、ヴァイオリンを弾いてゐる人等連も賑やかである、而し總ては幹部に任せ切りと云つた様子だ、一般の闘争心は貧弱な様に感ぜられた、檄電の披露をすまして本部に歸り感じたまゝを藤林君初め其他の人に話すに、唯も同様の感想を持っていたので早速蓮花院に誰かを送ろうとしたが適任者が生憎く見當らないので、蓮花院にゐる二三の人に統制を取つてもらつて頼む事に協議一決した。

斯くするうちにも同志の面々は續々登つて來ては新しい報道をして呉れる、それをすぐに各宿所に知らすべく傳令を出す、氏名をば帳簿に記入する、其して班に編入、夫から班長に通達する、各宿所の傳令が種々の報告をもつてくるので其の受付新聞記者との應接等本部内は實に目の廻る様な有様だ、靜かになつた時分と思へば夜の十一時を過ぎてゐる頃だ。

餘裕が付いたので、本部付書記の海堀君と附近を散策すべく寺門を出る大阪であれば眞夏の七月の夜だものでも暑くて寝られない時だが、さすが海拔三千尺の高峰高野山上である、白ツボンにワイシャツ一枚では寒い位だ。月は淡く中天に澄み切つておだやかな顔を見せてゐる、其下に各寺院はすでに夜の帷を下してゐる靜けさ、流石に宗祖地を偲ばしめた、總本山たる金剛峰寺の門前に到れば大杉大楨を以て圍まれたる本堂は如何にも莊嚴

を極め、天下の靈場たる事を無言のうちに物語つてゐる。

道を轉じて鶯谷に海堀君と同行警戒旁行つた、成程俗化した所だ、三味線の音唄の聲が取りざりに聞ゆる、射的場もある、なまめかしい女の聲が絶えず聞えてくる、實に淫卑な所である、さきに感ぜられた靜かな思ひもすつかり打ち毀かれてしまつた。

各寺院のお坊さん達が出て來て大びらに遊ぶ場所とも言へる、高野山改革運動の起るのも無理はないと思ふがお坊さん達のため劃時代的に一面から考へて見れば堅苦しい宗教家達が精神慰安の爲の絶好の場所であると思つて行くのであろう。多くの信徒を集めて説教する時の鹿爪らしい坊主の顔と此んな所で遊ぶ時の坊主の顔とを見くらべた時、なんだかくすぐつたい様な氣持にならざるを得なかつた。

約一時間程の警戒の後本部に歸りて寢に付いた。

明くれば十五日未明に起きて見る、初めて見る高野山の朝は實に秀嶺である、誰もゐない寺院の庭を散歩する氣分も亦捨て難いものである。かく靜かな場所を一人歩き廻つてゐる色々な事が胸に浮んでくる、緊張味がかけれのか、落付いた爲か、身體の悪さが身にこたへるのを覺ゆる、氣を強くせねばならないのだ、今しばらく頑張らねばならないのだと思ひ返して居間に入る、連日の疲れの爲に同志は皆また白河夜船の高いびきである、僕は寢ようと思つても眠むれないので、仕方なくそこにあつた改造の七月號に讀みふけてゐるうちに何時かう